



TITLE:

ブルック・ファーム

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. ブルック・ファーム. 経済論叢 1960, 86(2): 83-110

ISSUE DATE:

1960-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132776>

RIGHT:

經濟論叢

第十六卷 第二號

労働市場論なき賃金論……………岸 本 英 太 郎 1

ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 19

イギリス革命における農業・

土地問題分析の視角……………尾 崎 芳 治 47

社会科学のひとつの立場……………出 口 勇 蔵 61

《記 事》

昭和三十五年度京都大学経済学会大会における公開講演

および研究報告の要旨…………… 74

昭和三十五年八月

京 都 大 学 經 濟 學 會

ブルック・ファーム

穂 積 文 雄

一

一九五九年、ドッグ・ウッドの花うつくしい晩春の一日、わたくしはハーバード大学より自動車を駈ってブルック・ファームをたづねた。一八四三年の三月、一少年が乗り合ひ馬車でボストンのブラトル・ストリート (Brattle Street) から、おなじく、ブルック・ファームに行ったときは、「九マイルの距離を、丘陵の起伏する田舎を通うつて、マサチューセッツや東部諸州によくみかける石壁をめぐらしたきもちのよい農園や、よろいどをみどりいろにぬり、前面にささやかな花園をしつらへ、周囲には果樹や日よけの樹木が哨兵のようにたっているうつくしい白い家をすざて行つた」とあるが、そのような牧歌的なおもむきは、いまはない。わたくしの乗る自動車は、市中の垣々砒のごとき舗装路を走りつづけるばかり。それでも、行き交う車もようやくまばらになったようにおもふころ、行くての道路中央にひとつのインディケーターがたっているのがみえた。白い板に黒い字で「ブルック・ファーム、一八四一年より一八四七年まで社会実験の場所、右へ」とあったとおもう。指示どおりに行くことしばし、道の左側にエントランスを通じて、前とおなじようなインディケーターがみえる。ことなるところは「右へ」がなくな

らてゐるだけ。(Brook Farm/Scene of Social Experiment/1841-1847/and of Camp of Andrew 1861) 車を乗りいれると、なかは一望広漠たる原野。一条の舗装路がずっとおくに通じている。なおすすんで、ほどよいところに車をとめておりたつ。あたりに人かげはない。ただ晩春の斜陽がわたくしらと車のかげをながく路上にうつし、ここちよい微風が樹間をわたるのみ。閑寂そのものである。みわたせば、丘あり、谷あり、林あり、草原あり。はるか西をのぞめばチャールス河がしづかにながれている。その対岸は高くなつて、工場のような建物がみえる。河の手前、左方よりの大きな白い板のようなものは、いわゆるドライブ・イン (drive in 野外映画場) とみうけられる。それにしても、このあたり一木一草もブルック・ファームのなごりをとどめるかとおもへば、なつかしき、いとどふかまるをおぼえる。あの石の上にはゼノビアがいこうたこともあろうか。この樹の下ではホリングオースが涼をいれたであらうか。ホーソンがのぶどうをみつけてよろこんだのはかしこのあたりではあるまいか。²⁾ リブレイはテオドル・パーカー氏がたづねてくると談論二三時間におよぶも、なお足れりとせず、パーカー氏の去るにあたつておくつて行く。行くこと一マイルばかりにして引き返へす。すると今度はパーカー氏がリブレイについてくる。こうして、はなしに夢中の二人はおなじところを往復数回におよぶを常としたとつたへられるが、それはあのあたりでもあつたであらうか。低徊願望すれば、想念はつきからつきへとつづいてとどまるところをしらぬ。いつしか、わたしは、百十数年の時のへだたりをとびこえてしまう。わたくしのまふたにはありし日の風景がうかびあがる。

ニュー・イングランドの夜があける。黎明のひかりが、ここ、ブルック・ファームにさしそめる。午前五時にさきだつことしばし。つのぶえの音があたりのしじまをやぶつてひびきわたる。それにこたえるかのごとく犬がけた

たましくはえまわる。その方に、むけるめに、ふるい百姓家がうつる。うつくしいオールド・ニュー・イングランド家屋のひとつ。ひろいホールが一方のはしから他方のはしまでつらぬいている。そのいづれものほしにドアがある。なかに入ると、ホールの左側に二階に通ずる階段がある。二階のまどによつてそとをながめると、家の南側に農場とひろい牧場がみえる。家の正面のドアを排してそとに出ると、前方に馬車道がある。木の垣と、桑とはりもみのなみ木が二つのどてをかこんでいる。どては牧場の小川の方へとくだつてゐる。どての上には灌木のしげみと花壇がある。一〇ヤードばかりいったところに、優雅な、れの木が一本立っている。そのそばに門があり、ガーデンやファームに通じている。家の背面にはふたつの翼が建て増されている。その階下はものおき小屋と馬車部屋になっている。東に面して大きな納屋がある。石柱の上に建てられている。その南側がひろい裏庭 (barnyard) にひらいてゐる。家と納屋の間には馬車道があり、構内に通じてゐる。

台所は食堂のすぐ背後にある。皿のがちゃがちゃいう音がきこえる。そのそとを数人のひとびとがあらこちとうごきまわっている。

たれか納屋で家畜の世話をしている。防水用のタールをひいたむぎわら帽子をかぶり、青いしろをした農夫の、わぎをきいている。うわぎは牛皮の靴の上部にたれかぶさつてゐる。よくみると、リプレイ氏である。五時半、ふたたびつのぶえの音がひびきわたる。また犬がおきでてほえたてる。くろい犬である。そのこえはかなしげであり、音楽的である。だがつのぶえと調和しない。やがて、ひとびとが他の建物からぞろぞろと朝食をたべにやってくる。ひとびとは、病気でないかぎり、みな、この百姓家の食堂で食事をするのである。服装がすこし風がわりでおもしろい。ちよつと絵のような衣装——男は青い、うわぎ (tunics) に黒い革帯をしめ、ひげをいっぱいはやしてい

る。それは当時はそのちにおけるほど普通ではなかった。わかい婦人はつばのひろい帽子をかぶり、髪を優雅にたらしめている。学生や寄宿者 (boarders) はいろいろ、まちまちのきものをきている——がひとめをひく。

ながい、てんじょうのひくい食堂には食卓が何列もならんでいる。六列もあろうか。そのおのおのに平均一四人かける。白くぬつたベンチが椅子の代用をしている。食卓の上には白い食器がそなへられている。白い湯のみ (mug) がコップとグラスの両用をかねる。白いテーブル・クロスがかかっている。なにもかも清潔である。ちりひとつない。

部屋のおくにリブレイ氏がかかる。百姓着はぬいで、さっぱりと身だしなみをして、にこにこわらっている。眼のひかりがめがねの金のふちに反射するようにみえる。かれの右側にはかれの夫人がかかる。そのそばに、かれの妹がかかる。かの女は朝の茶かコーヒーをつぐ。学生の大部分はこの食卓につく。リブレイ夫人はたけが高く、優雅で、しゃである。かの女の夫と同様近視眼であるが、なにか遠くのひとまたはものをみようとするとき、ときとして金ぶちのめがねをかけるだけである。食卓の料理はあつさりしたものである。上等のパン、それに農場からもってきたバターがおかれて⁹⁾いる。わかい子供の中からえらばれたかわいい給仕たちがこまめにうごきまわる。年かきの青年が指揮している。かれが給仕隊をつくったチャールス・ダナ (Charles A. Dana) であらう。給仕たちの食事はさめぬようにとくにあたためてある。みわたしたところ、食事はあじけないものでもなければ、かたくなるしいものでもない。がやがやと、たのしげなむだばなしが、はづむ¹⁰⁾。まことにたのしいひとときである。ユーモアが出る。ウィットがとぶ。ナンセンスがかわされる¹¹⁾。

農場の一番高いところに立つてみれば、農場はうつくしいアムヒセアターをなして、周囲を丘陵でかこまれてい

る。宛然一幅のうつくしい絵である。かしこには林檎の果樹園がある。路傍のあちこちには日よけの樹木が立っている。耕地がある。つぎはつぎのようである。そこでは家庭用のとうもろこしや野菜が栽培されている。そのあるものは丘の南面を占めている。また、あるものは、くぼ地の中にある。正面にひろい牧場がある。きもちのよいみどりの海のように、はるかかなたまでひろがっている。

さきの建物、あのふるい百姓家——それは「ハイヴ」(Hive)というかわい名でよばれている。いみじくもつけたものである——から馬車道が他の建物に通じている。その道はほとんど牧場のレールまでくだっていつて、ふたたびのぼるところでピルグリム・ハウス (Pilgrim House) に達する。それがいちばんとおい建物である。そこから道は転じて高みにのぼり、のこりの他の建物、——コッテッジ (Cottage) とバイリー (Byry) にむかう。¹²⁾ピルグリム・ハウスはもと、最初の所有者の名によってモートン・ハウス (Morton House) とよばれていたが、のちになって、名をあらためてこうよばれるにいたったものである。¹³⁾それは長方形で玄関の両側に室のある建物である (an oblong double house)。みはらしのよいところにある。白い簡素な家で、装飾はない。当時のニュー・イングランドのたいていの田舎家とおなじように、がっちりとしたつくりである。周囲に樹木がない。ここでもっとも魅力のない建物である。¹⁴⁾

コッテッジは十字架の形をしており、四つのきりづま (gables) がある。やはり簡素である。教室が六つばかりある。この建物は褐色にぬつてある。それはちいさなまるい丘 (a little knoll) の上にあって、背部に花壇がある。ぐるっと芝生にとりまかれている。

ハイヴのかなた、ハイヴにもっともちかく、この領域の中央にアイリー (Ery) がある。(Ery はリブレイ氏

のかきかたである。あるものは Eyrie とかき、またあるものは Aerie とかき¹⁶⁾。この建物の土台はプディング・グ・ストーン (Pudding-stone) というロックス・マッシー・壺岩 (Roxbury conglomerate) の岩棚 (ledge) である。まさにバイブルのことばをそのままに「岩の上に建てられた家」(built his house upon a rock)¹⁷⁾である。そして、どりのテラスが二段になってそれをきぎあげている。いちばん高くて、いちばんみごとな位置を占め、樺と楓の森を背にして、果樹園にのぞみ、眺望絶佳である。それは正方形のひらたい木造で、うすいはいろがかかった沙岩いろ (a light gray, sandstone color) にぬってある。なめらかなつぎ板 (smooth, matched boards) をもちひ、おおきな、ひらたいいし、こぶら (cornice) やでんぢ (fange) が頂上のあたりのところにめぐらされている。それで、あまりにも簡素にすぎることまぬがれている。それでも、それは、みるめ、にきもちがよい。そして、ひくいフレンチまどがある。それは上段のテラスにむかつてドアのようにひらく。

内部をうかがうと、かずかずの絵画が四方のかべをかざり、しだのおしは (pressed fern leaves) がだんろだな (mante) のつばにいっぱいあり、去年の秋の葉のかげやかしいなごりがかべのそこかしこにとどめられているのがみえる。そこには、また、ピアノもある。その上に油絵がかかっている。その反対の側にはリブレイ氏の書籍がつつしりとならんでいる。それはライブラリーである。ドイツ書が多い。とくにリブレイ氏の編纂になる一四冊そろいの「外国文学範例」(Specimens of Foreign Literature) が異彩をはなっている。¹⁸⁾このライブラリーは、もとハイヴの四壁にオーブンの書架にのせてならべられていたもので、イギリス、フランス、ドイツの奇観書に富み、リブレイ氏のものである。アイリーが建ってからライブラリーはこのあたらしい建物にうつされたが、書物は、従前どおり、みなに解放されている。そのことはリブレイ氏の寛容を示すものでなければならぬ。¹⁹⁾

これらの建物はハイヴから約四分の一マイルほどはなれており、おたがいの間は数百ヤードある。²⁰⁾ブルック・ファームの中心はハイヴである。²¹⁾ここでみなが食事をとることはすでにみたところのごとくであるが、そこは、したがって、また、社交の場であり、活潑なたのしい生活 (the busy, active, happy life) が展開する。これに反し、アイリーはい、こい、とりクリエーションの場である。²²⁾ここでは音楽の夕べがもたれたり、ダンスがおこなわれる。コッテッジには、主としてちいさい子供たちのための、教室がある。ビルグリム・ハウスは、おもに、家族もちの宿舎にあてられている。²⁴⁾

さて、食事は半時間ばかりでおわる。²⁵⁾みなは、それぞれ、そのいとなみにむかう。

コッテッジではわかい子供たちのクラスがはじまる。コッテッジはここでもっともうつくしいたものであるから、それにはいちばんむいている。というのは、わかい心性 (mind) はそのうつくしいことの印象をうけ、授業もうけやすいとかがへられるし、それに、あらゆる手段をもちいて訓育 (school discipline) の時間を快適ならしめ、生徒をして、訓育が愉快なリクリエーションではないということをわすれしめねばならぬ、という意見がおこなわれているからである。²⁶⁾

牛小屋ではプロング (prong フォーク状のもの) が四つついている、普通ダング・フォーク (dang-fork) とよばれる肥料かきをもつて肥料車に肥料をつみこんでいるものがある。あちらではポテトを植えているものがある。こちらではえんどう、まめ、を植えているものがある。そうかとおもうと、せつせと、小牛のために藁と乾草をきざむに余念ないひとのすがたもみえる。²⁷⁾いづれも、まだ、しろうとくさいところがある。それはおおえない。しかし、たれもかも、みな熱心である。一生懸命にやっている。それに、とてもたのしそうである。なかにひとり師匠

格に見えるものがある。あれがリブレイ夫人がドワイト氏 (Mr. John Sullivan Dwight) 氏への手紙の中で、「なんでもこころえている」(knows how to do every thing) とたたえたウイリヤム・アレン (William Allen)²⁸⁾、ホーソンのブライスデール・ロマンス (Blithedale Romance) の中のサイラス (Silas Foster) であらう。²⁹⁾ おもしろいことに、みながこのように、はたらいっているのに、まどから、ぼんやりとながめているものもある。³⁰⁾ そうかとおもうと、かなた、牧場のふちにそうて、カウ・アイランド (Cow Island) の方へゆうゆうと散歩しているものもある。³¹⁾ とにかく、ここには、命令・支配・隷属といったものは、ほとんど、みられない。³²⁾

やがて、日午にあたる。一二時半になる。すると、ふたたび、つ、ぶ、えがなる。昼食のしらせである。ひとびとは、ハイヴにあつまってくる。の、ら、から、教室から、納屋から。³³⁾ 昼食がすめば、また、それぞれのいとなみがはじまる。こんどは子供たちも、それぞれ、その力に応じた労働に従事しているのがみかけられる。おとなにまじつてのらしごとにはげんでいるものもある。³⁴⁾ 花園のしごとに熱中しているものもある。うさぎにえさをやっているものもある。³⁵⁾ みな、たのしげに、はたらいっている。自然の魅力にひかれ、好奇心にかられ、おもしろくてたまらぬといったようすが、よくわかる。³⁶⁾ ときのたつにも気がつかぬようである。しかし、ときはたつ。日は西にうすづいて、かれらの影をながく地上にひく。ねぐらにいそぐ鳥のこゑも、しきりとなる。そして、時計の針は五時をまわってなかばにいたる。すると、また、つ、ぶ、えがひびきわたる。夕食のときをつげるあいづなのである。³⁷⁾ ひとは、みな、しごとをやめて、ハイヴにあつまる。食堂は、にぎやかになる。例によつて、わかい給仕たちが、せわしく、うごきまわる。御馳走がたくさんでる。ポイルド・ビーフ、ヴェジエタブルズ、グレイアム・ブレッド (Graham bread)、上質のバター、インディアン・プディング (Indian pudding) 等。³⁸⁾ 談笑がわきあぐる。室内に和気がみなぎる。

テールをへだててのたのしい応酬がはじまる。そのくちばやなやりとりの中にこめられた含蓄のひらめきは、他人には、その意味がつかめない。ブルック・ファームの会話の中にとけこむのは、門外漢には、まったく、むづかしいことである。そして、そこには、また、貴族的な雰囲気もただよっているのを感じないではいられない。³⁹⁾だが、「そこには証券市場や財産づくり、乃至、財産ふやしのために心身を消耗しつつして、疲労困憊、意気消沈、家に帰って来ても、ふきげん、失望のあまり、ものもいわけぬ男子は、ひとりもない。そこには、フランス衣装や、レースや、ダイヤモンドで、ひととほりある婦人は、ひとりもない。みんな、じぶんたちは、ただじぶんたち自身の故に尊敬されていることを知っている。そのことが、いっそう、めいめいの内にある個性をひきだす。だから、これだけのひとをそろへて、しかも、そのおのおのが、それぞれに、なんらかの、とくべつの魅力(charm)をもっているということは、とても、よそでは、みられぬところである。⁴⁰⁾

夕食がおわれれば、まづは自由の時間になる。ひとびとは、一日のじごとより解放せられて、おのおのそのこのむところにしたがうのである。それでは、いかにあるであらうか。しばらく、かれらのなすところをみよう。あるへやに、ひとがあつまっている。いってみると、談話討論の会がひらかれている。問題は「衝動」(Impulse)である。それについてはなしあっている。座には三〇人ほどいる。ちようど、ころあいのサークルである。あくびするものはひとりもない。ただ好奇心にかられただけできたものがないからであらう。三十歳あまりのうつくしい婦人がはなしている。よくみれば有名なフラー女史(Miss. Margaret Fuller)である。例によって、自然(Nature)をたたへ、「精神」(Spirit)は自然を通じて高揚するのであって、自然にとつてかわるのではない。」(…the spirit ascending through, not superseding, nature.)と述べている。かの女は、感性(Sense)、智性(Intel-

lect)、精神をはかりにかけて、智性を強調している。けだし、こゝにつどへるひとびとは、どちらかといへば、智性をかるんじるかたむきがみえるからであらう。やがて、美の性質についてはなしに花がさく。⁴²⁾

そこをあとにしてそとにでる。ピルグリム・ハウスのホールに、あかりが、あかあかとついている。いつてみる。いまやダンスがたけなわである。うつくしいダンスである。ひとりの青年のそばにわかい女性がたっている。ダンスにくわわらないで、しきりと、かたわらの椅子にかけている、いまひとりの、女性とはなしながら、ひとのおどるのをながめている。くだんの青年が室をよこぎって行ったとおもうと、椅子を一脚もつてきて、じぶんのそばにおき、その、たっているわかい女性にすすめる。そのわかい女性がかれの親切を感じたのがわかる。三人は、ダンスがおわるまで、いっしよに、そこにかけていた。ダンスがおわつて、かの女がかへるうとしたとき、かれは「おやすみ」(“Good Night”)とあいさつした。そのとき、かの女は、かれのはおえみを天上のものともみた。時計の針はいま一一時半をさしている。

夜もようやくふけた。ブルック・ファームは、しずかない、こゝに入つた。すべては闇のとばりにおおわれてしまつた。まぶたにうかんだ情景は消えさる。ピルグリム・ハウスもない。ハイヴもない。コッテジもみえない。アイリーもみえない。リブレイ氏もない。フリー女史もない。たくさんのわかい男女もすがたをけしてしまつた。気がついてみると、わたくしは、ようやく、うすづく斜陽を浴びて立っている。みえるものは広漠たる原野、きこえるものは樹林をわたるかぜのそよぎ。わたくしは唐詩選の句が口をついて出るのをどうすることもできない。

今年花落ち顔色改まる

明年花開くも復た誰か存らん。

己に見る松柏摧けて薪と為るを
更に聞く桑田変じて海と成るを。
古人復た落城の東に無く
今人廻って対す落花の風。
年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず。

それは、そのまま、このとき、このところにおける、わたくしの心境、感懐にはかならない。

悵然として仰げば無心の白雲が悠悠として天空を過ぎ行く。喟然として俯せば、チャールス河が静に樹影をうつしている。わたくしは

閑雲疊影日に悠悠

物換り星移り幾秋をか度れる

と、くちさきみながら家路についた。

- (1) John Thomas Codman, *Brook Farm, Historic and Personal Memoirs*, Boston: Arena, 1894, p. 46.
- (2) Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, edited by Randall Stewart, New Haven: Yale, 1932, p. 75.
- (3) Ora Gannett Sedgwick, "A Girl of Sixteen at Brook Farm," *Atlantic Monthly*, LXXXV (1890), 397.
- (4) A Letter from Sophia Eastman to Mehitable Eastman (to be found in *Autobiography of Brook Farm*, edited by Henry W. Sams, University of Chicago, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, Inc., 1958, p. 80.), and(7)

- (5) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395.
- (6) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 47.
- (7) Arthur Sumner, "A Boy's Recollections of Brook Farm," *New England Magazine*, X, New Series (March-August, 1894) (to be found in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, p. 242.)
- (8) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 47-48.
- (9) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 396.
- (10) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 49.
- (11) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 396.
- (12) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 49-50.
- (13) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 112, Foot Note, 13.
- (14) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 50.
- (15) Ora Gannett Sedgwick *ibid.*, 398.
- (16) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 50.
- (17) *The New Testament, The Gospel according to St. Matthew*, Chapter 7, 24.
- (18) John Thomas Codman, *ibid.*, pp. 50-51.
- (19) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395.
- (20) Arthur Sumner, *ibid.*, p. 312.
- (21) Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 395, Arthur Sumner, *ibid.*, p. 312.
- (22) Ora Gannett, *ibid.*, 400.
- (23) *ibid.*, 398.
- (24) John Thomas Codman, *ibid.*, p. 51.
- (25) Marianne Dwight, *Letters from Brook Farm 1844-1847*, edited by Amy L. Reed, Poughkeepsie, N. Y.; Vassar

- College, 1928, p. 7.
- 28 Amelia Russell, "Home Life of the Brook Farm Association," *Atlantic Monthly*, XLII (July-December, 1878) 562.
- 29 Letter from Nathaniel Hawthorne to Louisa Hawthorne (to be seen in the above mentioned *Autobiography of Brook Farm*, p. 18.)
- 30 *ibid.*, Zoltan Haraszi, *The Idyll of Brook Farm*, Boston: public Library, 1937, P, 18.
- 31 Nathaniel Hawthorne, *Blithedale Romance*,
- 32 R. W. Emerson, Historic Notes of Life and Letters in New England (*Complete Wopks of Ralph Waldo Emerson*, ed. by E. W. Emerson, Boston: Houghton Mifflin Company, 1904, X, p. 367.)
- 33 Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, *ibid.*, p. 75.
- 34 R. W. Emerson, *ibid.*, pp. 367-368.
- 35 Above mentioned Letter written by Sophia Eastman, (*Autobyography of Brook Farm*, p. 80), Marianne Dewight, *ibid.*, pp. 7-8.
- 36 See (27.)
- 37 John Van Der Zee Sears, *My Friends at Brook Farm*, New York: Desmond Fitzgerald, 1912. p. 68.
- 38 Arthur Sumner, *ibid.* 311.
- 39 Marianne Dwight. *ibid.*, P.8
- 40 John Van Der Zee Sears, *ibid.*, p. 66.
- 41 *ibid.* pp. 51-52.
- 42 See (4)
- 43 Ora Gannett Sedgwick, *ibid.*, 397.
- 44 Margaret Fuller's journals in R. W. Emerson, and J. F. Clarke, *Memoirs of Margaret Fuller Ossoli*, 3 volumes, London: Richard Bentley, 1852, II, p. 273.

③ Marianne Dewight, *ibid.*, pp. 46-47.

二

右はブルック・ファーム¹⁾のある日の状景である。ブルック・ファームのある日の状景はそれが晴天の日であるか雨天の日であるかによつて、ちがひがあろう。また、春夏秋冬、季節によつて変化がみられるであらう。さらに、ブルック・ファームは七年間存続し、その間変遷なきを得なかつた。その初期と晩年では状景は、かならずしも、おなじとはいへない。これは、比較的初期・晩春・晴天のある日のつもりである。しかし、これにより、他の日を類推することはさまたげないであらう。なお、ここにあらわれる状景は單なる空想の産物ではない。みな事實にもとづく。しかも、ドッキュメンツのうらづけがある。煩をいとはず註を付したのは、それをあきらかにするためにほかならない。ペダントのひそみにならうつもりでは、もうとうない。ただし、つぎのことをことわっておかなければならない。ひとびとの行動はすべて同一の日のこととしてあつかわれているが、それは、かならずしもそうではないということである。それでは事實とはいへないではないかといわれるかも知れない。そういわれば、そのとおりである。わたくしは、それをみとめるにやぶさかなものではない。しかし、わたくしの意図はある一日を究明考証することにあるのではない。ブルック・ファームの生熊をうかがうにあるのである。ブルック・ファームでは毎日がどのようにすごされていたかをあきらかにしようとするにある。そのアトモスヘアを感じとることにあるのである。それが、ねらひなのである。しかも、それを、確実なドッキュメンツにもとづいて達成しようとするのである。そのためには、そういうあつかいも、いまの、わたくしとしては、やむを得ないとしてゆるされてよか

ろうかとおもう。けだし、その場合、ある特定の日だけの記録によるときは、その一日の状況は内容がきわめて空虚になることをまぬがれない。それではわたくしの意図を実現することはおぼつかない。それに、わたくしの右に述べたような意図を実現するためだけなら、そうあつかうことがなんらかのさまたげとなるとはかんがへられない。わたくしはそうかんがへる。それだからである。

それにしても、わたくしは、なんのためにブルック・ファームの生態をうかがおうとするのか。なにゆえにブルック・ファームで毎日がいかにすごされていたかをあきらかにしようとするのか。また、なぜなれば、そのノット・モスヘアを感じとうとするか。もとより、それは、それ自体において意味のあることであろう。それはそれ自身として興味なしとしないでもあろう。それはそうにちがいない。すくなくとも、わたくしは、それを肯定することができる。しかしながら、わたくしにとつては、それが問題のすべてではない。と、いうよりも、それ自身が問題なのではない。そういった方が、より適切であろう。わたくしにとって問題なのはこのようなブルック・ファームがいかにあらわれ、いかにうつり、いかにほろびたかである。ことをかえていえば、その生成、推移、消滅これがわたくしの問題なのである。しかるに、それらを追究するためには、まづ、その生態をとらえることが必要である。すくなくとも、それが無意味でないことはたしかである。わたくしは、そうかんがへる。しかるに、ブルック・ファームはすでにきえさつている。いまはない。したがって、その生態は、いまにおいてたづねるよしもない。しかし、国は破れても山河はのこる。ブルック・ファームはすでにないといつても、そのあととはのこっている。そのあとに立てば、それだけブルック・ファームの生態への近接が可能となるであろう。わたくしは、そうおもった。かくて、わたくしはブルック・ファームをたづねた。そして、わたくしは、はからずも、ブルック・ファームの生

態をまふたにとらへた。そういうしだいである。わたくしは、これより、すすんで、本題に入ろう。わたくしは、まづ、ブルック・ファームの生成をうかがうであらう。

ブルック・ファームはいかにあらわれたか。その生成はいかにあつたか。ブルック・ファームはひとつのユートピアの実現・実践の運動である。したがつて、ブルック・ファームはいかにあらわれたか、ブルック・ファームの生成はいかにあつたかの追究は、まづ、ユートピアの実現・実践の運動はいかにあらわれるか、その生成はいかにあるかの究明にはじまらねばならない。それでは、ユートピアの実現・実践の運動は、いかにあらわれるか、その生成はいかにあるか。それについては、わたくしは、かつて、いささか、私見を述べたことがある²⁾。それで、ここには、それをくりかえすことをさける。ここでは、社会の矛盾・欠陥がユートピアを生ぜしめ、矛盾・欠陥の重圧の増大と、ユートピアの現実への近接が、ユートピアの実現・実践の運動をうながすというにとどめる。

つぎに、ブルック・ファームは近世のアメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動のひとつである。だから、ブルック・ファームがいかにあらわれたか、その生成はいかにあつたかの追究は、近世アメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動はいかにあつたか、その生成はいかにあつたか、の解明を要求する。すくなくとも、それを重要ならずとしない。それでは近世アメリカにおけるユートピアの実現・実践の運動はいかにあらわれたか、その生成はいかにあつたか。ところが、それについても、わたくしは、すでに述べたことがある³⁾。それで、あらためて、ここに、述べることをひかえる。ここでは、ただ、つぎのことを指摘するにとどめる。新大陸は旧大陸のひとつのめ、に希望の天地とうつつた。かれらはアトランチックのかなたに社会的理想が実現できるとかんがえた。そこにユ-

トピアの花をさかせ、実をむすばしめるに適した土壌をみいだした。まづ、信仰の自由をもとめるひとたちが、ユートピアを展開した。ついで、インダストリアリゼーションの圧力がユートピアを簇生せしめた。

そして、ここでは、フォーカスをブルック・ファームにあわそう。

十九世紀に入るとアメリカにおしよせるインダストリアリゼーションの浪がようやくたかまる。自由の天地はその自由の故に、たつ浪も、ひとしお、はげしい。かくて、自由は自由を圧迫する。インダストリアリゼーションにともなう階級分裂の緩和、以前、じぶんのみせとくいをもっていた職人^{アイチマン}が、かつていだいていた労働の尊厳性の回復、いまや生産手段の所有よりきりはなされた賃労働者の地位の向上が、ようやく重大な問題として、社会の前面にかびあがってくる。しかも、一八三七年の金融恐慌、その翌年夏の広汎な旱魃、それにつづく冬季の未曾有の酷寒、これらが相合して、右の事情を強化する。それは、それに対する反応を、すくなくとも、二つの方面に生ぜしめずにおかなかった。そのひとつの方面は労働者階級である。けれど、かれらは、直接に、その影響をうける立場にある。そして、それだけに、その反応は大きい。それは当時における労働運動において展開した。わたくしは、いま、それについて具体的に述べるといふとまがない。わたくしは、それをアメリカ経済史、乃至、アメリカにおける労働運動史の記述にゆずる。いま、ひとつの方面は知識階級である。けれど、知識階級は、かならずしも、その影響を直接にはうけないかもしれない。しかしながら、かれらは、その知性の故に、その矛盾、欠陥を、敏感に感受する。その知性は理想をいだかしめる。理想は改革を志向せしめる。そして、そこに、ユートピアの実現・実践の運動がおこりうる。それはあやしむにあたらない。いわんや、シェーカー、ラパイツ、ロバート・オーエン等、ユートピアの先蹤が、すでにちかくにあるにおいて、それは、なおさらでなければならぬ。一八四〇年代、

アメリカにおいて、ユートピアの一大ブームの出現をみる所以である。

しかるに、アメリカにおいても、ニュー・イングランドにおいては、これにくわえるに、さらに、ふたつの事情があつたことをわすれてはならない。それは、当時の、ニュー・イングランドの特質と、そこにおける知識階級の間にみられる思潮である。

「一九世紀の初期におけるニュー・イングランドは」とチャールス・エリオット・ノートンはいう。「住むによき地であつた。住むとは、まだ、まばらであつた。大きな都会はなかつた。もつとも大きなボストンでも、人口は、かろうじて、二五十万、住民は同種、純粹のイギリス系で、主として農夫と舟乗り。かれらは知能あり、勤勉で、宗教心あつく、かれらの間には大きな平等性があつた。大富家もなければ、極貧者もなく、たれも安業にくらしていた。もつともまづしいものといえども、圧迫や飢餓のおそれから自由であつた (free from the fear of oppression or starvation)。ひととひとのあいだからは自然であり、友好的であつた。生活の一般的な習慣は簡素・儉約であつた。しかし、どんなちいさな町でも、たいてい、洗練の、教養の、さらには適度のしかし純性な優雅の、伝統的な模範 (traditional standard of refinement, of intellectual culture, and even of a moderate though genuine elegance)。を保持している家庭がなんけんあつたものである。これ以上真実にデモクラチックな社会 (community) は、いまだ、かつて、なかつたし、デモクラチックの原理に基礎をおいた社会 (society) の利点と機会がより充分にかつ自由に享受された社会も、いまだ、かつて、なかつた。その利害関係は比較的せまく、大きな人類の生活に貢献することはちいさかつた。それは、そのとおりである。それは、過去のおもにを相続することがあまりないようにみえた。そして、それにちがいはない、とするも、それは、また、民族の尊い家宝の多くの

もののわけ、ま、え、からも、たたれている。だが、しかしながら、それは、そのことを、あまり、重要視しなかった。それは、みづからを、旧世界より解放し、独立の精神 (spirit of independence) をいだいていた。それは、自信にみち、希望をもつて将来を楽しみにして待ち受けた。その希望は、もつとも賢明なひとにも不条理とはおもわれなかった。ここでは、ひとには、旧来の陋習や特権にわずらわされることなく、どれだけのことをなしうるかをしめすべき、自由な舞台があった。そして、ここでは、とくにニュー・イングランドにあつては、正義に基礎をおいた社会のあたらしい秩序が、史上にその比をみないみごとな成果を約束するのみでなく、また、すでに現実の成果を示して祝福をうけていた。それはまさにきたるべきものの先蹤にすぎなかった。その社会の全氣質が楽天的・友愛的となり、初期のカルヴィンの教理のむかしの峻厳さが弛緩し、そして、この世とあの世がユートピアの様相をおびるにいたるのは、ふしぎではない。

繁栄の危険、限度をしらぬデモクラシーの危険、無制限な移民より生ずる危険、は、まだ、予見せられていなかった。それらの危険は、しだいに、そのすがたをあらわすはずであつた。一八三〇年以前にそだったジェネレーションはそれらの危険について、経験もなければ、恐怖もなかった。

王室の知事バルチャー (the Royal Governor Belcher) が、『世界の異様な隅一隅』 (“the uncouth corner of the world”) とよんだところのものにおけるこの社会状態……⁵⁾

このようなところに、右のような事情がおきるとき、それが、その、ひとびとに、あたえる影響は、さらに、いつそう、はなはだしいものがなければならぬ。それはみやすいところといつて、よからう。

また、一九世紀のなかばよりすこし前、異常な知的感情の浪 (an extraordinary wave of intellectual feeling)⁶⁾

がアメリカにおこつた。その中心はニュー・イングランド地方であつた。それはジュッルム・ウント・ドラントであつた。いわゆる、トランセンデンタリズム (Transcendentalism) がそれである。

トランセンデンタリズムは、もと、ユニタリアン (Unitarian) によるピューリタニズム (Puritanism) への反動^{リアクツヨ}よりおこる。ニュー・イングランドはビルダリム・ファーズが、メイフラワ号 (Mayflower) よりの第一歩を印したところ。もと、ピューリタンの地である。カルヴィニストの地である。カルヴィニズムは峻厳をきわめるをもつて知られる。しかしながら、ものきわまれば変ずる。それは万有の通則である。その通則のあらわれを、ここにおいてはトランセンデンタリズムにおいてみるといおうか。そもそも、ユニタリアニズムは信仰の一派である。それは一つの人格における神の観念 (a conception of God in one person) の上に立ち、三つの人格における神の観念 (a conception of God in three persons) といふところのトリニタリアニズム (Trinitarianism) と対立する。その思想を源流遠くさかのぼり行けば初期キリスト教会に達するという。しかしながら、今日のユニタリアニズムはその起源を宗教改革 (Reformation) の時代にもつ。それは、ヨーロッパにおいては、各地における指導者によりてそだてられ、ひろめられてきた。アメリカにおいては、それはニュー・イングランドにおけるコングリゲーションナル・チャーチ (Congregational Church) の内よりうまれ出た。ニュー・イングランドにおけるコングリゲーションナリストの自由派が、しだいに結合して行き、ついに、一八一五年、保守派よりユニタリアンの名をうけるにいたつたのである。ユニタリアニズムは、もと、「自然における神の内在」 (Immanence of God in the nature) を説くが、この教理がニュー・イングランドに入るにおよんで、個人主義、自恃を信ずる一の神秘主義思想に展開した。それは、当時のヨーロッパにおける、とくにイギリス・ドイツにおける、哲学や文学の思想の動きやオリエ

ントの宗教思想によって強化され、宗教においてはトリニタリアニズム (Trinitarianism) を排し、原罪にあまんとせず、アダムの子たることをやめて神の愛児となり、自己の内の聖なる性質に調和せる生を送らんとする。かれらはマインドとスピリチュアルな自由を謳歌して人間に必要なのは自己の内にあるもの、神に到るにプリチャーズの必要なしと信ずる。さらに、かれらの指導者の中には労働を尊重するものもあり、知識と労働の合一をとく。いわく、知識人も労働せよ、労働者には知識をあたえよ、知識人が労働するとき、労働者は間暇を得、したがって知識をおさめることができる。

かれらはグループをなし、ボストン・カンカルドにおいて、しきりに相会し、このあたらしい思想を談じてうむところをしらず、時人かれらを称してトランセンデタリスト・クラブ (Transcendentalist Club) とす。ヘマーソン (Ralph Waldo Emerson)、ヘッジ (F. H. Hedge)、リプレイ (George Ripley)、アルcott (Bronson Alcott)、フーラー (Margaret Fuller)、パーカー (Theodore Parker) 等比々みなこれに属す。

ブルック・ファームは、実に、かかるアトモスヘアの中から生まれ出たのである。その主唱者はジョージ・リプレイである。そのことは、ブルック・ファームが、はしめ、リプレイス・ファーム (Ripley's Farm) と称されていることによつてもうかがうことができる。

ジョージ・リプレイ (一八〇二—一八八〇) はマサチューセッツのグリーンフィールド (Greenfield in Mass.) のひと、一八二三年ハーバード大学を卒業、一八二六年ボストンにおいて、ユニタリアンの牧師 (Unitarian ministry) となる。かくて、在職約一五年、その間、パーチャース・ストリート・ンサイエチー (Purchase street Society) の牧師 (pastor) としてコンミニチーの知的、精神的向上のための努力において、同僚の活潑かつ有能な協力者で

あつた。⁸⁾かれは、またボストンにおいて一の学校をひらいた。その学校は一九世紀の四〇年代、第一流の名声を博したとつたへられてゐる。⁹⁾そこには、遠くマニラより、はるばる笈を負うて、来り学んだものさえあることが、あきらかにされてゐる。¹⁰⁾さて、かれは一八四一年、惜しまれて牧師の職を辞し、ブルック・ファームの経営に入る。しからば、いづごろからブルック・ファームの構想をもつにいたつたものであらうか。ブルック・ファームの構想は、すでにふれたごとく、また、のちにあきらかとなるがごとく、一のユートピアのカテゴリーに属する。かれがブルック・ファームのユートピアよりも前になんらかのユートピアの思想をいだいたか、どうか。もし、いざいたとすれば、それはいづごろからのことか。そして、それはいかにあつたか。それらについては、いまのわたくしは、なんともいえない。しかしながら、ブルック・ファームのユートピアの構想に関するかぎり、それは一八四〇年の秋ごろからはじまつたものといつてよからうとおもう。それが、そのころ、かれの胸中にあつたことは、そのころ、ボストンやカンカドで、よく、かれらの会合において、それが話題となつてゐることよりして、あきらかである。¹¹⁾そして、そのことは、今日のこつてゐるかれらの間に交わされた書簡が、証明してくれる。それが、そのころにはじまるということは、つぎの二つのことより推定することができよう。その一つ。フリー女史が一八四〇年十月二八日付の手紙の中において、

市でリプレイ夫妻にお目にかかりました。リ氏は、ますます、かれの新計画に夢中になりました。かれはあまりに樂觀的で、事物を胸中でゆっくり、熟せしめることをしません……¹²⁾

とかいてゐる。ここで、新計画といい、また胸中でゆっくり熟せしめないということは、それが、リプレイの胸中にこのころに生じたものであることをうかがわしむるものでなければならぬであらう。いま一つ。リプレイ夫妻

は一八四〇年の夏をブルック・ファームで過ごしている。そして、それは、かれらにとつて非常に楽しかったようである。そのことは、その当時一八四〇年八月一日の日づけでリブレイ夫人がブルック・ファームより、ドワイト (John S. Dwight) へあてて、つぎのごとくかいているによつて、あきらかであると、いつてよからう。

われわれのファームはたのしい場所です……この静穏なひきこもり所において、わたくしは、どこかで、わたしをまちうけていてくれているとおもつていた、世事よりの完全な隔離と精神の安息をみいだしました。……鳥と樹木、なだらかに傾斜するみどりの丘、そして、めのとどくかぎりどこまでもつづくほしく、きくのはたけ——それから、わがまどのむこうがわのしげみにおおわれたみどりの岸の下の清い流れの小川がわがいこいにはしづかなるしらべをかなで、とよさかのぼる朝日には朝の歌をうたいます。ここには夢のような日が多いです——牧場のそぞろあるき、ちかくのみどりなる丘の上のくるみの木蔭によこたわりのまどろみ、さては、しろい小馬にのつての、ちかくにいと多いみどりのこみちや道路のなんマイルも、なんマイルもの騎行、……¹³⁾

そして、ブルック・ファームがかれらの氣に入つたことがかれらのブルック・ファームの計画と無関係でないとかんがえるのはむりではあるまい。そうだとすれば、ブルック・ファームの計画がうまれるのはその夏以前ではあり得ない。その秋ごろということになるう。あるいは、この夏にかれら大妻の間に、それについてはなしが、ときにおこつたことが、ありうるとかんがえてもよいのではなからうか。

そして、そのはなしにあづかつたものには、リブレイ夫人や、妹ソフィヤ・リブレイはもとより、エマーソン、フラー、アルcott等をあげることができる。ナサニエル・ホーソンもそのうちに入れてさしつかえあるまい。そして、そのほかに、たくさんあつたことはうたがない。ただその名を記録によりて確実にあげることがむづかしいというだけである。

つぎに、それでは、そのユートピアの構想そのものはいかにあったであらうか。それについては、できれば、リブレイミズからをしてかたらしめるにしくはない。ところが、リブレイは理論的にはあまり述べていないらしい。¹¹⁰しかしながら、一八四〇年秋十一月九日一書をエマーソンによせて、その計画への加入を勧誘している。そして、それにおいて、わたくしは、かれの構想の基本がよくうかがえるようにおもう。それで、いささか長きに失するきらいなしとしないがあえてかかげよう。もともと、直接には、いま、ここで問題とするところに関係ないようにおもわれる箇所があるかも知れないが、それでも、それは当時の事情をあきらかにする役割をはたしうるとかんがえられる。それで割愛することせず、あえて全文をかかげることにする。

拝啓、カンカルドでのわれわれの会談で、わたくしが設立したいとおもっているアッソシエーション^{アソシエーション}の理念をあなたが完全に理解されたように、どうも、かんがえられませんか。いま、われわれは、はやい時期に、それを実行にうつしたいとおもいますので、あなたの御支援、御協力の恩恵に浴するに足るものでありますか、どうか、について、あなたが御決定をくだされるのにやくだつため、より明確な計画を提供して、あなたの御判断を仰ぎたいと存じます。

御承知のごとく、われわれの目的は、いまよりも、より自然な知的な労働と手の労働の結合 (a more natural union between intellectual and manual labor) を保証し、同一人の内にある、かんがえるひと、と、はたらくひと、とを、できるだけ、むすびつけ、すべてのひとに、その趣味と才能^{興味と才能}に適應した労働をあたえ、そうして、かれらの勤勞の産果をかれらに確保することによって、最高の精神的自由を保障し、教育の恩恵と労働の利得を、すべてのひとに開放することによって、精神的奉仕の必要を排拒し、かくて、自由な、知的な、そして、教養のあるひととひとの社会、そこでは、ひとと相互の關係は、われわれの競争制度の圧力の中においておくりうるよりも、より單純にして、健全な生活^{健全な生活}を可能ならしめるような、社会を提供するにあらのであります。

これらの目的を達成するために、われわれの企図するところは、ガーデンとファームを結合し、たくみに耕作すれば、すべて

の家族の生活資料をみたすに充分であるような、一小区域の土地を取得すること、これにくわえるに、学校 (school or college) をもつてすることで、その学校においては初歩の基本より最高の教養にいたるまで、もともと完全な教育をさつげます。われわれのファームは、そこに住む人種を改良する場となるであります。思想は労働の作用を支配するであります。そして労働は思想の発展に寄与するであります。われわれは勤労するも、苦役なく、真の平等を享受して、しかも、俗悪におちいることはないことを確信いたします。

ニートン (Newton)、ウエスト・ロックスベリ、およびデダムの、^{ボークス}境界にある、うつくしい地所を、きわめて妥当な条件で、われわれに提供しようという申し出でなされています。その土地は、わたくしは此夏、しばらく、そこに住んだことがあるので、よく、しっています。これにまさる土地は、さがしても、得られるものではありません。われわれは現在のところ、三・四の家族が、来年の四月のはじめに、引越し、農場の耕作と家屋の建築にあたり、秋には、さらに、できるだけ多くのひとを受けいれる準備をなし、かくて、インスチテューションを、ともかく、実行に入ることができるかぎりの簡素なしかたで、また、最小の人数で、開始するつもりでいます。だから参加希望者全部を抱擁するのは、すくなくとも、二三年後のことになりましょう。われわれは、みずからのおもさによって、崩解してはなりません。われわれは徐々に成長して、つよくならなければなりません。そうすれば、われわれの実験に、われわれの加入してもらいたい、ねがっているひとびとを、みんな引きつけることに、成功するであります。

現在における急務は、必要な資金を獲得することにあります。現在われわれはプランを修正しましたので、カンカルドの論議の際にはなされたよりは、ずっとすくない額ですみます。あのときは、われわれは五〇、〇〇〇ドルいるとおもいました。周密な計算の結果、現在、われわれは三〇、〇〇〇ドルあれば、地所と十家族のための建物を購入し、一年間の作業を遂行するに必要な剰余が出るのが判明しました。

われわれは、この額を株式会社に対する出資方法により、インスチテューションの友人の間で調達する計画であります。出資者に対しては、一定利子の支払を保証し、出資金そのものに対する担保には不^{リジルト}動産をあてます。そうすれば、たれも損失の危険はありません。かれは、他の投資から得るとおなじ、充分な利子をうけとるであります。同時に、他方においては、一つのインスチテューションに貢献しつつあるのであります。そして、そこには、貨幣の真の使用の保持、その悪用の追放があ

ります。必要な額が富裕な資本家からくるはずはありません。かれらの本能は鑄貨コインのかかる使用に抗議します。それは、われわれの理念に共鳴し、その実現を、みづからの協同によってではないまでも、かれらの貨幣によって、援助することをよろこぶひとびとから得られねばなりません。あてにすることのできるとおもわれる出資が若干あります。われわれの間で、われわれは、おそらく、一〇、〇〇〇ドルつくることができましょう。残余の額は、加盟する意志の有無にかかわらず、われわれに好意をもつひとびとの出資にまたねばなりません。

かくも、もろもろの神聖な理念を実行するに適したプランを、わたくしは、このほかに想定することができません。もし賢明に遂行せられるならば、それはこの国、この時代、を光被することでしょう。たとい目の出とまでは行かなくとも、黎明の星ではあるでありましょう。われわれはなんらかの、かくのごとき、機軸プレジデントをもたねばなりません。より不徹底な変革は無益であります。一個の実際家であるわたくしには、それは火をみるよりもあきらかであります。わたくしは労働の神ライフ性を信じます。わたくしは「わたくしの肉と血を土地から穫り入れる」ことをねがいます。しかしながら、そのためには、わたくしは孤立してはたらし、不利にあまんずるか、あるいは、階級をことにし、ほとんど友人とすることのできないや、とい人の奉仕サービスを利用するか、そのいづれかをえらばねばなりません。なぜなら、わたくしは、じぶんのにぎるく、わを他人にふるわさねばならないから。石灰の、おけをわたくしの草の上にはかりあけることは、わたくしには、できません。わたくしは教育ある友人たちが、はたらき、かんがえ、生活し、各人が全体の利益に最大の貢献をする競争のほかは、なんらの競争をしない社会をみたいとねがいます。

個人的には、わたくしの趣味と習性は、わたくしを他の方向にみちびくでしょう。わたくしは世間とそこに住むひとびとよりの高踏に情熱をたぎらします。それを、現在提供されている土地において、わたくしは容易に行うことができます。その土地をわたくしは賃借することができます。そして、そのことは、わたくしの他の資源と相まって、わたくしの個人的利害の関するかぎりでは、わたくしを、きわめて快適な状態におくでありましょう。わたくしは、きつと、わたくしだけの、ささやかな神の都をもつ。そして、こころよく行けば (please God)、いつかは、わたくしのくるまを駈カって市場に行き、青物をうりたいとおもいます。しかしながら、わたくしは、大なる社会善の前には、このような、じぶんひとりだけの感情は犠牲に供しなければならぬと感じています。わたくしは、あなたの御意見がうけたまわりたいです。あなたの御決意は、高い希望をみたすは、まさにこのときにあるか、あるいは、また、このしことは将来に属するかという問題について、わたくしの解決に資するところ大なるも

のがあるでありましょう。いま、さいさきは、すべてよい。いろいろの才能を打って一丸として事にあたる用意がととのっています。すべてのものは、われわれが、まさに起って、きづくべきことを指示しています。われわれにして、もし、この機会を逃がさんか、不眠のネメシス (unsleeping Nemesis) は、われわれから、われわれのもとめる恩恵をうばいとるでありましょう。ひとはしらず、わたくしとしましては、それについて、これほどかんがえることが二度とできないことはたしかであります。わたくしのころは他の目的にしたがうにちがひありません。そして、わたくしは、かくもうるわしきひかりが消えたことをなげきつつ、運命にあまんじるであります。このたびの選挙のばかさわぎで、つまらなく蕩尽されている富の、ほんのわづかばかりでもって、一軒の家の礎石をおくことができるのです。そしてその家は遠からずして、諸国民の願望となるのです。

わたくしは、われわれの友人である「実際キリスト者」(“Practical Christians”) がかれらの「規準」(“Standards”) — 文書 — すなわち、規定の規準 (a prescribed rule) の作成を主張するというのを、ほとんど、わすれるところでした。このためかれらは分離しました。おそらく、われわれは、かれらがいない方がよいでしょう。かれらは善良なひとたちです。かれらには、われわれの調味 (a spice) に必要なし、おがあります。しかしながら、かれらの理念に適従するには、われわれは、あまりに自由であり、あまりに抱擁力に富み、あまりに教養の美に愛着するものであります。かれらのかわりに、われわれは S・G・メイ (S. G. May) 氏から一〇人乃至二二人の「実際家」(“Practical Men”) の応募を受けています。メイ氏はかれ自身この提案に関心をもち、いづれ参加したい意向であります。どうか、わたくしが、あなたに對しなしたと同様虚心恒懐、御意見をおきかせください。そして、わたくしが相変らずあなたの友人であり、忠実な僕であることをお信じください。

ジョージ・リブレイ

二伸、わたくしは、このくわだての現段階においては、いかなる提案も、義務をとまなうものとかんがえられることはないというのを付言しなければなりません。われわれが知りたいとおもうことは、ただ、ほんとにあてにすることができるところのものだけであります。ただし、いかなる誓約も、アッソシエーションの規約がみな同意を得るまでは、承認されません。

わたくしは、あなたが、もし、なかまのただしいるしに確信がもてれば冒險に乗り出してもよい、といわれたことを、おもい出します。これについて、わたくしは、うかがわせていただきたい。われわれのアッソシエーションはいろいろな階級のひとびとから構成せられてはならないかどうか。もし、われわれに、愛し愛される友人があり、われわれの個人的同情はつよくはな

いが、その一般的理念がわれわれのものと一致し、その才能・能力がこれらの奉仕を重要なものとするならば、それらのひとひと、よろこんで合体すべきものとなつたうしはかんがえます。たとえは、わたくしの教区のひとりの善良な洗濯婦がこのくわだてにはいるのをみとめてもらいたいとのぞみます。かの女は、たしかに、ミネルバでもなければヴィーナスでもありません。しかし、われわれは、かの女のふたりのことも、たゞ教育をほどこして知識をあたえ、いろいろの素養を身につけてやりた¹⁵いとおもいます。われわれが、とめどめてほしいとをあらわす若干の農夫たちについて、おなじことがいへます。(未完)

- (1) フルック・ファームは、本来、地名である。しかし、ここには、そこちうちたてられた、社会をさすものとする。
- (2) 拙稿「エリートユンについて」経済論叢・第八五巻・第六号(昭和三五・六) ③ 同上。
- (4) For example, Chester Whitney Wright, *Economic History of the United States* New York, 1949, pp. 339-343. George Soule, *Economic Forces in American History*, 1952, pp. 165-169.
- (5) Charles Eliot Norton, L. L. D., "Henry Wadsworth Longfellow" (to be found in *The Poetical Works of Longfellow*, Ward, Lock & Co., Limited, London and Melbourne, P. v.)
- (6) Lafcadio Hearn, *A History of English Literature*, Tokyo, 1927, Vol. II, P. 893. ("Notes on American Literature.")
- (7) Henry W. Sams, *Autobiography of Brook Farm*, p. 1.
- (8) "Rev. George Ripley," *The Monthly Miscellany of Religion and Letters*, May 1841, p. 293. (see Henry W. Sams, *ibid.*, p. 16)
- (9) John Van Der Zee Sears, *ibid.*, p. 54. ③ *ibid.*
- (10) For example, see Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 4 (no. 3), 5 (no. 4) etc.
- (11) T. W. Higginson, *Margaret Fuller Ossoli*, Boston: Houghton Mifflin Co., 1884, p. 180. (see, Henry W. Sams, *ibid.*, p. 5 (no. 4))
- (12) See Henry W. Sams, *ibid.*, p. 3 (no. 1) ③ *ibid.*, p. 1.
- (13) O. B. Frothingham, *George Ripley*, Boston: Houghton Mifflin Co., 1882, pp. 307-312.